

## 一橋大学におけるワークショップの覚え書き

キャスパー・ブルーシ イェンセン (寺戸 宏嗣 訳)

この場を借りて、社会学的・STS的な分析と、社会人類学、そして哲学とがやや特異な形で混ざり合っている『ドゥルーリアン・インターセクションズ』<sup>2</sup>の背景を少しお伝えしたいと思います。私自身は科学技術社会論 (STS) という、社会学や哲学、歴史学や人類学に留まらず、コミュニケーション論やメディア論といった様々な分野からの研究で構成されている、学際的でハイブリッドな分野で仕事をしています。もちろん、どんな学問分野であれ簡潔にそれをまとめることなど出来ませんから、ここでは私がとりわけ大切だと考えている STS の中心的側面のひとつだけに絞って話をしましょう。それは、人間のアクターと非人間のアクターとの対称性という考え方です。この考え方は、ブルーノ・ラトゥールと彼の同僚達がアクターネットワーク論の名の下に展開してきたものです。私にとってこれが何故とりわけ大切なのかと言いますと、組織の中であれ村の中であれ、人々の間で起きていることは、動物でもテクノロジーでも何でもよいのですが、他の存在によって常に媒介され変形されているのだと考え始めるやいなや、人間というものの自体も変容し始めてくるからなのです。人々は、その関係的な性質において変容してゆく存在、つまり、常に自身を取り巻くすべてのものと関わり合い、それらのものと互いを構成し合っている存在になるわけです。そして、このことはあらゆる社会分析に疑義を呈するものです。というのも、ほとんどの社会学や人類学が含まれると思いますが、そうした分析の大半は、きわめて人間中心ないし人間主義的であるのが実態だからです。例えば社会や文化、親族やコミュニケーション、呪術や宗教への関心が主にどのようなものだったかを考えてみて下さい。ふつうそこで目にすることになるのは、人々に囲まれた人々、人々と語り合う人々、人々を解釈する人々なのです。

どうしてそれなら単にラトゥーリアン・インターセクションをめぐる本にしないのでしょうか。ひとつには、これまでの STS の展開を見てみると、しばしば対称的な分析という約束を果たしていないと感じているからです。それは誤った具体性 (*misplaced concreteness*) とでも呼びたくなることに関わるものです。何を言いたいかと言いますと、さまざまな分野出身の研究者の多くが、どんな事例にでも応用できるような伝統的な類の理論のひとつとしてアクターネットワーク論を捉えるようになってきたということです。ラトゥールが促したように、アクターを追いかけてさまざまな人間や非人間の存在の間に

---

<sup>2</sup> Jensen, C. B. and K. Rødje (eds.), *Deleuzian Intersections: Science, Technology, Anthropology*, (Berghahn Books, 2009).

ある結びつきのネットワークを跡付ける、ということがよく行われますが、こうした結びつきはしばしば弱々しいか、少なくとも薄く記述されたものです。例えば、どのように毎日私が携帯電話やコンピュータや電車を使って他の人々と結びついているのかを跡付けるだけでは、私の社会性について多くを語るものとはなりません。これらの存在によって、私の世界との付き合い方や世界の理解の仕方がどのような形を得たり変形したりするのか、また逆に、世界をどのように概念化するかによって、さまざまな非人間の存在との付き合い方がどのような形を得たり変形したりするのか。こうしたことを厚く関係的に記述する必要があるのは明らかです。これは STS に向けて人類学者がよく投げかけてきた批判です。結びつき (connections) の研究としては優れているかもしれないけれど関わり合い (relations) の研究としてはそうではない、というわけです。さて、アクターネットワーク論や広い意味での STS のどこにも、厚い関わり合いよりも薄い結びつきのレベルに留まりなさいと求めるものはありませんから、理論上ではこの批判は間違っていますし、間違っていることを示す多くの事例がたしかにあります (たとえばモルの著作<sup>3</sup>や、ラトゥールによるアラミスについての本<sup>4</sup>、または私自身の近著<sup>5</sup>もきっとそうです)。ところが実際のところ、そうした批判はかなり頻繁に的を射ています。人間と非人間はネットワークを形成しているのだ、とまたしても示す事例研究がこれでもかと生み出されているのです。もちろんこれでは満足のゆく分析水準にはなり得ませんし、だからこそ、優れた人類学や民族誌が STS から学ぶところがあるのと同じくらい、STS はそれらから学ぶところがたくさんあるのです。

それではドゥルーズはどこに入ってくるのでしょうか。これについては言うべきことがたくさんあり過ぎるくらいなのですが、彼(とガタリ)の仕事が重要だと私が考える理由の幾つかを手短かに示すことにしましょう。まず、ドゥルーズはラトゥールに大きな影響を与えました。しかし、ドゥルーズ流のリゾーム的アッサンブラージュ (rhizomatic assemblages) がそのままアクターネットワーク論で用いられているとは言い難いでしょう。[ドゥルーズにおいて] つながり、結びつき、関わり合いはあまりに多すぎるし、概念はあまりに「破天荒 (wild)」すぎます。たしかにドゥルーズ流の結びつきには多様な機械や動物のエージェンシーが含まれているわけですが、アクターネットワーク論のようにそれらを文字通りに取る必要はないはずです。それは『千のプラトー (A Thousand Plateaus)』のなかで B 級映画、騎士団、言語学、数学、資本主義、動物、子供、鳥、等々がどのように集められているかを見てみれば分かることです。ですから広い意味で言えば、

<sup>3</sup> Mol, A., *The Body Multiple: Ontology in Medical Practice*, (Duke University Press, 2002) 等。

<sup>4</sup> Latour, B., *Aramis, or The Love of Technology*, (Harvard University Press, 1996).

<sup>5</sup> Jense, C. B., *Ontologies for Developing Things: Making Health Care Futures Through Technology*, (Sense Publishers, 2010).

ドゥルーズのおかげで、STS は世界を新しいやり方で把握する力をひろげていけるよう「開かれた (out in the open)」ままにいられると言ってよいでしょう。他方、おそらく彼は（とりわけガタリとの仕事のなかで）人類学をもっとも貪欲に吸収しようとしたポスト構造主義者ですから、社会人類学のほうでもドゥルーズは興味深い人物です。民族誌的資料のうわべだけを使っているとして人類学者はおもに彼を批判してきましたが、同じことをそうした人類学者にも言えると私は思います。思考の必要性（と不可避性）を主張するドゥルーズのおかげで、人類学者は（もちろん記述とは決して単純なことではありませんが）ただ記述するだけでなく概念化することの難しさに向き合えるのです。ここにおいてドゥルーズは STS を援護してくれています。というのも、非人間のエージェンシーに触れたからには、国家であれ、親族であれ、アニミズムであれ、もしくは生きられた人間関係でさえ、それらについての人間主義的な民族誌に取り組むことはもはや不可能となるからです。正真正銘これこそ人間的で社会的な瞬間にいるのだと私たちが考える瞬間とは、実際のところ、社会技術的な環境に私たちがもっとも溶け込んでいる瞬間なのでしょう。ドゥルーズが言ったように、「欲望[さえも]常に組み立てられなければならない」のです。こういうわけで、ドゥルーズを前に人類学もまた気を抜いてはいられません。

ふたつの簡潔なコメントで終わりにしましょう。どちらも理論と実践の関係についてのものです。あらゆる社会関係は多くの非人間的な存在と共にネットワーク化されている、または組み立てられている、という点でアクターネットワーク論とドゥルーズが一致しているとすれば、ここには私たちがふつう理論と呼ぶ社会的存在も含まれることとなります。また、それゆえ理論は私たちが通常想定しているようには働かなくなります。アッサンブラージュから理論は飛び出すことが出来ないのであり、理論とはむしろ、そこに更に加えられるつながりなのです。つまり理論とは実践の一部なのであり（もしくは、すべての実践は理論でもあり）、それゆえ理論は現実を表象する (represent reality) のではなく、むしろ現実を変えるかもしれない創造的な関わり合い (inventive relations) を構成するのです。この意味で理論／実践という二分法は消えてしまいます。その代わりに、ふつう私たちが「経験的」とか「概念的」とか呼んでいる流動的な存在の「開かれた集合」がたくさん交差する点 (intersection) に研究者は位置することになります。研究者の創造的な仕事とはこうした集合の間に連続性を打ち立てることであり、これこそが（上手くいった場合に）記述という創造的行為を通して起こることなのです。

最後になりますが、このことから、ドゥルーズに従えば人類学はこうでなければならない、こうしなければならないというような強い意味での「ドゥルーズ流人類学 (Deleuzian anthropology)」ないし「ドゥルーズ流科学技術社会論 (Deleuzian STS)」なるものがあり得ない（しあるべきでない）理由が明らかになったことと思います。そうした発想は、理論を遂行的なもの (performative) としてではなく表象的なもの (representational) として考えているのですが、まさにこうした理論の見方にドゥルーズは挑戦したはずで

その一方で、『ドゥルージアン・インターセクション』と言うのは十分に理に適っています。なぜなら、インターセクションという語が示唆しているのは、経験的なものと概念的なものに関わり合う道筋には数限りない可能性があり、創造され現実化されるのを待っているということなのですから。それは人類学者の仕事を待っているのです。